

日本地質学会 *News*

Vol.24 No.5 May 2021



一般社団法人日本地質学会

The Geological Society of Japan

理事

任期：2020年5月23日～2022年総会

会長（代表理事） 磯崎行雄（東京大学）

副会長 佐々木 和彦（応用地質（株））
平田大二（神奈川県立生命の星・地球博）

常務理事 中澤 努（産業技術総合研究所）
副常務理事 岡田 誠（茨城大学）

執行理事 ウォリス サイモン（東京大学）
緒方信一（中央開発（株））
大藤 茂（富山大学）
狩野彰宏（東京大学）
亀高正男（（株）ダイヤコンサルタント）
小宮 剛（東京大学）
坂口有人（山口大学）
高嶋礼詩（東北大学）
辻森 樹（東北大学）
星 博幸（愛知教育大）
松田達生（工学気象研究所）
矢部 淳（国立科学博）

理事 上松佐知子（筑波大学）
芦 寿一郎（東京大学）
天野一男（東京大学）
安藤寿男（茨城大学）
内野隆之（産総研）
尾上哲治（九州大学）

笠間友博（箱根ジオミュージアム）
亀尾浩司（千葉大学）
亀田 純（北海道大学）
川端清司（大阪市立自然史博）
北村有迅（鹿児島大学）
清川昌一（九州大学）
後藤和久（東京大学）
小松原純子（産総研）
齋藤 眞（産総研）
杉田律子（科学警察研）
竹下 徹（北海道大学）
内藤一樹（産総研）
納谷友規（産総研）
奈良正和（高知大学）
西 弘嗣（東北大学）
根本直樹（弘前大学）
野田 篤（産総研）
早坂康隆（広島大学）
藤井正博（応用地質（株））
細矢卓志（中央開発（株））
保柳康一（信州大学）
松田博貴（熊本大学）
三田村宗樹（大阪市大学）
道林克禎（名古屋大学）
矢島道子（東京都立大学）
山口飛鳥（東京大学大気海洋研）

監事

任期：2020年5月23日～2024年総会

岩部良子（応用地質（株））
山本正司（山本司法書士事務所）



一般社団法人日本地質学会

〒101-0032 東京都千代田区岩本町 2-8-15 井桁ビル

電話 03-5823-1150 FAX 03-5823-1156（振替口座 00140-8-28067）

e-mail: main@geosociety.jp ホームページ <http://geosociety.jp>

日本地質学会 *News*

Vol.24 No.5 May 2021

The Geological Society of Japan News

一般社団法人日本地質学会

〒101-0032 東京都千代田区岩本町2-8-15 井桁ビル 6F

編集委員長 小宮 剛

TEL 03-5823-1150 FAX 03-5823-1156

main@geosociety.jp (庶務一般)

journal@geosociety.jp (編集)

http://www.geosociety.jp

Contents

案内……2

令和4年度版学習資料「一家に1枚」の企画募集

各賞・研究助成……2

公益財団法人住友財団2021年度基礎科学研究助成/公益財団法人住友財団2021年度環境研究助成/男鹿半島・大潟ジオパーク内での研究活動に対する補助金制度並びに各種申請等手続きへの支援

公募……3

国立科学博物館理工学研究部研究員(常勤職員 テニユアトラック)

公募/北海道大学大学院地球環境科学研究院准教授公募

紹介……4

Plattentektonik: Kontinentverschiebung und Gebirgsbildung Wolfgang Frisch・Martin Meschede著(水谷伸治郎)/田上ベグマタイト 中野聰志・里口保文編(竹内圭史)/美しい山々を国際線の機窓から楽しむ旅客機から見る 世界の名山 須藤 茂 編著(佐々木和彦)

表紙紹介……5

喜界島 隆起サンゴ礁(清川昌一・山崎敦子)

CALENDAR……6

お知らせ：日本地質学会ショートコース(第4回)開催します……6

支部コーナー……7

関東支部：サイエンスカフェ「VR!地球科学のアソビカタ」実施報告(小松原純子)

院生コーナー……7

研究室紹介：早稲田大学堆積学研究室(中野有紗)

学会記事……9

日本地質学会 2020 年度第4回理事会議事録

2020年度第10回執行理事会議事録/第11回執行理事会議事録

追悼……14

名誉会員 三梨 昂先生のご逝去を悼む(小玉喜三郎・山内靖喜)

巻末 会費口座振替依頼書

日本地質学会第128年学術大会 (2021 名古屋大会)

会期：2021年9月4日(土)～7日(火)

会場：オンライン開催

+ 名古屋大学東山キャンパス

演題登録受付中：6月30日(水) 18:00 締切

大会参加登録：6月中旬より申込受付開始

詳しくは大会 HP をご参照ください。

<https://confit.atlas.jp/guide/event/geosocjp128/top>

新型コロナウイルス感染拡大防止のため、学会事務局は現在もテレワークを継続実施しております。事務局へのご連絡・お問い合わせはメールでお送りください。ご理解・ご協力のほどよろしくお願い致します。

印刷・製本：日本印刷株式会社 東京都豊島区東池袋4-41-24



ご案内

国会以外の学会および研究会・委員会からのご案内を掲載します。

令和4年度版学習資料 「一家に1枚」の企画募集

文部科学省では、国民の皆様が科学技術に触れる機会を増やし、科学技術に関する知識を適切に捉えて柔軟に活用いただくことを目的として、学習資料「一家に1枚」を制作しています。これまで17種類の制作を行ってききましたが、令和4年度の第63回科学技術週間に合わせて、18種類目の学習資料「一家に1枚」を制作することとなりました。

ついでに、下記により学習資料「一家に1枚」の企画及び監修をしていただく方を募集いたします。監修者には、学習資料「一家に1枚」本体の制作に加え、テーマと内容が連動した媒体（特設Webサイト等）や、令和4年度版科学技術週間告知ポスター（学習資料「一家に1枚」とデザインや内容を連動させたもの）の制作にも御協力いただくことを想定しています。また、テーマ決定から学習資料「一家に1枚」の配布までの期間、広報媒体の作成を含め様々な広報活動にもエフォートを割いていただくことが想定されるところ、応募にあたっては上記に御協力いただけますことを要件としております。

期限：令和3年6月30日（水）17時必着

提出先：文部科学省科学技術・学術政策局人材政策課 科学技術社会連携係
（〒100-8959 東京都千代田区霞が関3-2-2）
メールアドレス：stw@mext.go.jp FAX：03-6734-4022

詳しくは、<http://geosociety.jp/uploads/fckeditor/others-pdf/2021ikkaniichimai.pdf>（参考）平成31年度（第60回）は、日本地質学会が提案した企画が採択され、期間中（平成31年4月15日～21日）に、「一家に1枚 日本列島7億年」ポスターが、全国に配布されました。

各賞・研究助成



日本地質学会に寄せられた候補者の募集・推薦依頼等をご案内致します。

公益財団法人住友財団 2021年度基礎科学研究助成

助成の趣旨：科学の進歩は社会の発展に大きな貢献を果たしてきました。科学は人類社会の未来を拓くことにつながるものです。この助成は、重要でありながら研究資金が不十分とされている基礎科学研究、とりわけ新しい発想が期待される若手研究者による萌芽的な研究に対する支援を行うものです。

助成対象研究：理学（数学、物理学、化学、生物学）の各分野及びこれらの複数にまたがる分野の基礎研究で萌芽的なもの（それぞれの分野における工学の基礎となるものを含む。）

応募資格：「若手研究者」（個人または研究グループ）

①国籍に関係なく、日本の大学等の研究機関に所属し、申請に関する所属機関長の承諾がとれるのであれば応募可能です。

②上記①以外であっても、日本国籍を持つ者または日本に永住を許可されている外国人は、応募可能です。尚、海外の大学等の研究機関に所属している者は所属機関長の承諾を得ることが必要です。

なお、研究者の所属が営利企業等の場合（兼務を含む）には応募不可です。

助成金：総額 1億5,000万円（1件当たり最大 500万円）

助成件数：90件程度

募集期間：2021年4月15日（木）～6月30日（水）

※E-mailの締切は6月9日（水）となっております。ご注意ください。

応募方法：財団ホームページから申請書をダウンロードし必要事項を記入の上、E-mailと郵送の両方でお送りください。

連絡先：
〒105-0012 東京都港区芝大門1-12-16 住友芝大門ビル2号館
公益財団法人 住友財団
TEL：03-5473-0161 FAX：03-5473-8471
E-mail：sumitomo-found@msj.biglobe.ne.jp
URL：http://www.sumitomo.or.jp/

公益財団法人住友財団 2021年度環境研究助成

助成の趣旨：現在、人類が直面している大きな問題の一つに環境問題があります。地球温暖化、オゾン層破壊、酸性雨、生物種の減

少、食料と人口、砂漠化、公害等様々な問題があり、その原因の探究と解決策の模索が続けられています。この助成は、環境問題の解決のためには、多面的アプローチによる分析と様々な対応策の構築が必要と考え、そのためのいろいろな観点（人文科学・社会科学・自然科学）からの研究に対する支援を行うものです。

助成対象研究：

- ・一般研究 環境に関する研究（分野は問いません。）
 - ・課題研究 2021年度募集課題「地球規模で深刻化する環境問題とポストコロナの時代での社会変化に関する環境問題の理解と解決のための学際研究または国際共同研究」
- 応募資格：研究者個人または研究グループ
- ①国籍に関係なく、日本の大学等の研究機関に所属し、申請に関する所属機関長の承諾がとれるのであれば応募可能です。
- ②上記①以外であっても、日本国籍を持つ者または日本に永住を許可されている外国人は、応募可能です。尚、海外の大学等の研究機関に所属している者は所属機関長の承諾を得ることが必要です。

なお、研究者の所属が営利企業等（兼務を含む）の場合には応募不可です。

助成金：総額 1億円

- ・一般研究 7,000万円、1件当たり最大 500万円
- ・課題研究 3,000万円、件当たり最大1,000万円

助成件数：一般研究 50件程度/課題研究3件程度

募集期間：2021年4月15日（木）～6月30日（水）

E-mailの締切は6月9日（水）となっております。ご注意ください。

応募方法：財団ホームページから申請書をダウンロードし必要事項を記入の上、E-mailと郵送の両方でお送りください。

連絡先：

〒105-0012 東京都港区芝大門1-12-16 住友芝大門ビル2号館
公益財団法人 住友財団
TEL：03-5473-0161 FAX：03-5473-8471
E-mail：sumitomo-found@msj.biglobe.ne.jp
URL：http://www.sumitomo.or.jp/

男鹿半島・大湯ジオパーク内での 研究活動に対する補助金制度 並びに各種申請等手続きへの支援

1. 補助金のご案内

男鹿半島・大湯ジオパークはジオパーク地域内での研究活動を全力で支援します！その一環である、調査研究や巡検の補助金と許可申請の手続きの支援についてお知らせします。男鹿半島・大湯ジオパークで調査研究や巡検を行う方はお早めにご連絡くださいますよう

お願いします。

(1) 男鹿市スポーツ合宿等誘致促進事業補助金：文化活動（研究室の巡検、卒業研究の調査等を含みます）・スポーツなどの団体が男鹿市内で行う合宿に要する宿泊費の一部を助成します。

【補助金額】1,000円（宿泊者が5名以上、1名1泊あたり）

【上限額】最大40万円（1団体あたり）

問合わせ：男鹿市観光文化スポーツ課スポーツ振興班

電話：0185-24-9102

<http://www.oganavi.com/camp/>

(2) 大潟村交流宿泊等誘致事業費補助金：大潟村内を活動拠点とするスポーツ文化合宿・農業体験等の誘致を行います（卒業研究や巡検にも活用が可能です）。

【補助金額】2,000円（1名1泊あたり）

【上限額】50万円（1団体あたり）

問合わせ：大潟村産業建設課

電話：0185-45-3653

<http://www.vill.ogata.akita.jp/administration/sport.html>

2. 許可申請等の支援のご案内

男鹿国定公園や文化財指定地において土地形状を変える行為や採取行為、草木の伐採を行う場合、事前の許可が必要な場合がほとんどです。ご不明なことがありましたら、お気軽に当ジオパーク推進協議会事務局にお問い合わせください。許可申請には時間がかかりますので、お早めにご連絡いただければ幸いです。

①自然公園法：男鹿国定公園内での調査・研究等に係る自然公園法手続き支援

②文化財保護法：文化財指定地等での現状変更、埋蔵文化財包蔵地内での土地採掘など詳細は、当ジオパーク HP をご覧ください
問合わせ：男鹿半島・大潟ジオパーク推進協議会事務局

電話：0185-24-9104

http://www.oga-ogata-geo.jp/support_research

公募

教員・職員公募等の求人ニュース原稿につきましては、採用結果をお知らせいただけますようお願い致します。



国立科学博物館理工学研究部 研究員（常勤職員 テニュアトラック）公募

職名・人員：研究員1名（テニュアトラック）
研究分野：科学史又は産業技術史
職務内容：科学史又は産業技術史に関する調査研究、標本資料の収集・保管、並びに展示・学習支援活動。科学史や技術史の視点から人間社会や地球環境を俯瞰し、実物資料に基づく調査研究や展示に取り組む意欲のある方。

特に物理学史資料や科学者資料を担当できることが望ましい。

所属：国立科学博物館理工学研究部科学技術史グループ

勤務様態：常勤（テニュアトラック）

テニュアトラック期間（任期）：5年

勤務先：独立行政法人 国立科学博物館 理工学研究部（筑波地区：茨城県つくば市天久保4-1-1）

応募資格：博士の学位を有する者（取得見込みの者を含む）またはそれと同等以上の知識・経験を有するもの

採用予定時期：令和3年10月1日またはそれ以降の早い時期

応募期間：令和3年6月28日（月）必着

応募書類提出先及び問合せ先

〒305-0005 茨城県つくば市天久保4-1-1

独立行政法人国立科学博物館

理工学研究部長 米田 成一

TEL：029-853-8901

FAX：029-853-8998

e-mail s-yoneda@kahaku.go.jp

公募の詳細は、博物館HPを参照してください。

https://www.kahaku.go.jp/disclosure/adoption/sci_engineer_20210414.html

北海道大学大学院地球環境科学 研究院准教授公募

公募人員：准教授1名

所属：大学院地球環境科学研究院 地球圏科学部門 環境変動解析学分野

専門分野：古環境学、堆積物コア分析と現場観測の組み合わせにより過去の環境変化の復元に取り組み、物質循環の視点に立って研究

を推進していく意欲と地球環境科学に関する大学院教育（古気候学、層序学、堆積学、及び同位体地球化学）に熱意のある方が望まれます。

教育担当：大学院環境科学院 地球圏科学専攻 生物地球化学コース

応募期限：2021年8月16日（月）（必着）

着任時期：2022年1月1日以降のできるだけ早い日

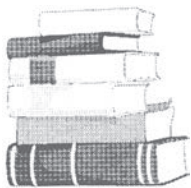
詳細は、<https://www.ees.hokudai.ac.jp/modules/bulletin/index.php?page=article&storyid=466> を参照してください。

書類の提出先および問い合わせ先：

〒060-0810 札幌市北区北10条西5丁目

北海道大学 大学院地球環境科学研究院 地球圏科学部門長 堀之内武

Email: horinout@ees.hokudai.ac.jp



紹介

Plattentektonik: Kontinentverschiebung und Gebirgsbildung

Wolfgang Frisch・
Martin Meschede著



Wissenschaftl. Buchgesell.; 4. durchgesehene
und aktualisierte Auflage, 2011年4月1日
発行, ドイツ語, 21.7 x 2 x 27.7 cm,
196ページ, ISBN-10: 3896787446

私は、最近、ある本を読みました。なかなかよく書けている本でした。

私は、かつて、地質学雑誌に、“Terrane”について、書いたことがありました(水谷, 1988)。その内容は、USGSのJones等が、北米大陸の太平洋岸、とくに、California-British Columbia-Alaska にかけて、地質調査の結果、到達した結論とそれに伴って気づかれた新しい概念(Terraneという概念)を分かり易く解説したものでした。大きな大陸と、大洋との間にある島嶼分布地域では、過去：その地質学的歴史において、あるいは、未来：近い将来において、必ず、議論しなければならない概念です。日本においても、ごく最近、“Terrane”という語を用いて、解説をはじめられた方もおられました。しかし、“Terrane”という語は、英語として、あるいは、地質学用語として、頻度高く用いられていなかったこともあって、関係の雑誌や文献に、登場することは、極めて少ないようでした。

私が、今回、ここで紹介する本は、上記の教科書ですが、以下に示すように、実に、丁寧に、『Terrane』を説明しています。この教科書の著者は、この本の引用文献によると、“古地磁気学”の研究者です。私を含め

て、これまで参考にした文献は、「古地磁気学者」の書いたものは、ほとんどありませんでした。その点、本書には、特色があります。題名が示すように、本書は、『Plate Tectonics』を解説した教科書です。「大陸移動説」に始まり、全部で13章からなります。

本書の137-144ページは、第9章として別章として、扱われています。その章は、章題として、『Terrane』(ドイツ語では、『Terran』)として、詳しく解説し、論じています。内容に関係ある文献が多数引用されています。なお、小林貞一(1956)が「Heterogen」として論じた『韓半島』を含む東亜地質を考えてみると、Terraneの概念は、一層良く理解出来ると思います。

参考文献：

小林貞一, 1956, 東亜地質, 朝倉書店, 253p.
水谷伸治郎, 1988, テレーン解析とカラーニュテクトニクス, 地質雑, 94, 977-996.

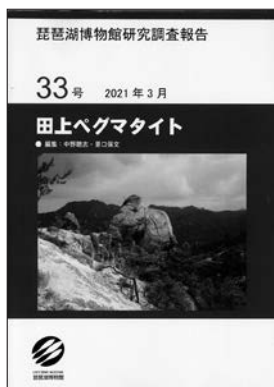
(水谷伸治郎)



紹介

田上ペグマタイト

中野聡志・里口保文編



琵琶湖博物館研究調査報告 第33号,
2021年3月発行, A4判, 175ページ,

滋賀県大津市南部に位置する山地は、標高

600mの太神山(たなかみやま)などを総称して田上山(たなかみやま)と呼ばれる。田上山は後期白亜紀の花崗岩からなり、岐阜県苗木地域、福島県石川地域とともに日本三大ペグマタイト産地として知られている。琵琶湖博物館研究調査報告の1冊としてまとめられた本書は、この田上ペグマタイトについての論文集である。

本書は3部構成になっており、「岩石としてのペグマタイト」「ペグマタイト鉱物・関連鉱物の研究・紹介」「田上ペグマタイトとその鉱物標本」からなる。「岩石としてのペグマタイト」は、ペグマタイト概論、田上ペグマタイトの産状、ほか1編からなる。中でも本論文集の主体といえる中野ほか論文「田上ペグマタイトの産状」は、本書のほぼ半分である78ページに及び、多くの図版により田上ペグマタイトの産状が詳しく記載されていて読み応えがある。「ペグマタイト鉱物・関連鉱物の研究・紹介」は鉱物各論13編からなり、田上ペグマタイト産の水晶・黒雲母・長石・電気石・トパーズ・ジルコン・ウラントリウム鉱物、球状花崗岩・接触変成堇青石、及び野洲・苗木岩体のペグマタイトがとりあげられている。「田上ペグマタイトとその鉱物標本」は4編からなり、琵琶湖博物館・京大総合博物館などのコレクションが紹介されている。

本書では一部カラー印刷を含む豊富な写真・図によりペグマタイト鉱物の産状が紹介されている。一部の写真がやや小さいのはもったいなく、誌面の余白の許す限り大きくレイアウトするとより良かったろう。余談であるが紹介者の個人的興味として、田上花崗岩体の接触変成作用によるインド石・堇青石三連双晶について、学生時代に関わりがあって懐かしくまた勉強してみたいと思った。また、田上ペグマタイトに関連して、大津市枝所在の個人経営の田上鉱物博物館が知られていたが、残念ながら2021年までに閉館している。

琵琶湖博物館研究調査報告は、琵琶湖博物館内にあるミュージアムショップ「おいでや」で購入できる。来館できない方はおいでやへご相談ください。

ミュージアムショップ「おいでや」<http://oydeya.com>

(竹内圭史)



紹介

美しい山々を国際線の機窓から 楽しむ 旅客機から見る 世界の名山

須藤 茂 編著



イカロス出版株式会社、2021年3月29日発売、
B5判、192ページ、ISBN978-4-8022-0977-9

「世界の名山」というタイトルを眺め、本を開いてみると、旅客機の機窓から撮影され

た世界各地の山々の綺麗な写真を次々とみることができる。表紙を含め291枚の写真には全部で700もの山頂が写っており、山々だけではなく文字どおり激しく蛇行する河川や特徴的な地形を見せる砂漠の写真なども入っている。

撮影場所は、アラスカ・カナダから始まり、米国本土、メキシコ・中米、西インド諸島、南米と続き、ハワイ、ニュージーランド、西太平洋、オーストラリアの太平洋地域から、アジアのインドネシア、フィリピン、台湾、韓国、中国中東部に移る。インド・インドシナ、ネパール・ヒマラヤ、中国西部・カラコルム、中東、ロシア・シベリアのアジア大陸中央部を経て、東ヨーロッパ、アルプス、南ヨーロッパ、アイスランドから最後はアフリカにおよんでいる。文字どおり「世界の名山」である。

写真の説明を見ると、「2つの山は原生代、25～16億年前の地層に中生代三畳紀の珪長質岩が貫入した後・・・」とか「その後は玄武岩・安山岩・デイサイト質マグマの噴出により美しい円錐形の成層火山を・・・」と書いてある。「う～ん なんと 地質の説明ではないか!」と思わず感心した。山々をテーマにした美しい写真集は多くあるが、この本ほど地質の説明を加えてある本は少ない。巻末に記載されている9名の撮影・執筆者の顔ぶれをみると、「なるほど! 地質屋の方々だ!」。

本の説明文に、「地質時代の名前」「岩石の名前」「地形の名前」「山が何でできているか」「外国の山の地質を調べる方法」「山はどうして高くなったのか?」などについて素人にもわかるように解説されており、地質時代の区分表や火成岩の分類表も添付されているので、さらに理解が深まる。

海外に出張で出かけた際、搭乗した旅客機

の窓から、これらの山々を撮影したと書かれている。私も出張の際、機窓から風景を撮影することがあるが、天候や太陽の向き、座席の位置などの条件によりなかなか傑作を撮ることはできない。何より「睡魔」が最大の障害となる。本の筆者らは、海外で克服しづらい時差ぼけに打ち勝って、これらの美しい写真を撮影したのだ。本のなかに「技術的な問題(山の写真が撮れるかどうかは運次第&金次第)」という説明文がある。中身を読むと、「眺めのよい席に座れるか」「座ってからすること」「難しい機窓越しの撮影」などについてわかりやすく書かれており、大いに参考となる。

そのなかで「ブロッケン現象」について触れられており、ニューカレドニアの環礁を背景に、搭乗機の影のまわりに円形の虹が写っている写真が紹介されている。私も国内線によく乗っていた頃、このブロッケン現象に注目していたが、撮影できたのは100回の搭乗につき2～3回といった難しさであったことを思い出す。

新型コロナウイルスの感染拡大が続く今、海外に出かけることは容易ではない。仮に出かけられたとしても、世界中を飛び回るのは時間的にも経済的にも大変なことであるのは間違いない。その点、この本を眺めれば、多くの世界の山々を見て海外旅行した雰囲気を楽しむことができる。また、Googleの地図と対比しながら本を眺めれば、臨場感がさらに増す。これは、これからのウイズ・コロナの時代にマッチした世界旅行のひとつなのかも知れない。

(佐々木和彦)

表紙紹介

喜界島 隆起サンゴ礁

写真・解説：清川昌一・山崎敦子（九州大学）

奄美大島から東に25kmに、世界でも有数の隆起量をもつ離水サンゴ礁からなる喜界島があります。Google earthをみると島周辺の海岸が白く縁取られ、直感的に不思議な島であると感じます。ここは、地質学的にも前弧側に位置しており、島の表面を10万年前から現在までのサンゴが覆い、地震による隆起・海水準変動を記録する世界的にも希有な場所です。写真は島の東側海岸を南に向かって撮っており、何段もの段丘面が見られます(標高最高地点は211m：七島鼻)。1982年放送の動く大地の物語(NHK)で小西健二先生(金沢大学名誉教授)が解説し有名になりました。その後も多くの研究者が訪れ、詳細な研究が行われています。2015年からは小学校校跡を利用して、喜界島サンゴ礁科学研究所(理事長：渡辺 剛 北大、所長：山崎敦子 九大)が設立され、世界にむけての研究や全国の子供・学生向けの実習など、幅広く活動を行っています。

CALENDAR

2021.6～

地球科学分野に関する研究会、学会、国際会議、などの開催日、会合名、開催学会、開催場所をご案内致します。会員の皆様の情報をお待ちしています。

★印は学会主催、(共) 共催、(後) 後援、(協) 協賛。

2021年

6月 June

★日本地質学会第13回代議員総会(オンライン開催)

6月12日(土) 14:00～

<http://www.geosociety.jp/outline/content0152.html>

地質学史総会・懇話会(ハイブリッド方式)

6月26日(土) 13:00～

場所：早稲田奉仕園セミナーハウス(会場も変更：新宿区西早稲田、TEL：03-3205-5411)

内容：

- ・志岐常正：「戦後京大地質学教室史—その虚像と実像」
- ・矢島道子：『地質学者ナウマン伝』を上梓して

(注) オンラインのURLは6月20日以降、希望者に送ります。矢島(pxi02070@nifty.com)までご連絡ください。

com)までご連絡ください。

7月 July

(後) 第58回アイソトープ・放射線研究発表会(オンライン)

7月7日(水)～9日(金)

<https://confit.atlas.jp/guide/event/jrias2021/top>

★日本地質学会第4回ショートコース

7月18日(日)

<午前>10:00-12:00「吾書くゆえに吾あり：論文執筆についての超個人的視点」磯崎行雄(東京大学)

<午後>13:30-15:30「地球科学の歴史から何を学ぶか」泊 次郎(科学史研究者)

申込締切：2021年7月5日(月)

<http://www.geosociety.jp/science/content0134.html>

(後) 科学教育研究協議会 第68回全国研究大会・福島大会(オンライン)

7月31日(土)～8月2日(月)

会場：伊達市立霊山中学校(福島県伊達市霊山町)

<https://kakyokyo.org/>

9月 September

★日本地質学会第128年学術大会(名古屋大会)

9月4日(土)～7日(火)

会場：名古屋大学東山キャンパス + オンライン開催

※セッションはすべてオンラインで実施(9/4、6-7)。演題登録数によって会期が短縮される場合があります。

演題登録・要旨投稿：6月30日(水) 締切

日本鉱物科学会2021年年会

9月16日(木)～18日(土)

場所：広島大学東広島キャンパス

<http://jams.la.coocan.jp/nenkai.html>

国際 Gondwana 研究連合 (IAGR) 2021年大会及び第18回 Gondwana からアジア国際シンポジウム

9月17日(金)～19日(日)(会議)

9月20日(月)～21日(火)(野外巡検)

会場：中国青島

www.gondwanainst.org/symposium/2021/IAGR2021Invitation.htm

2021年度日本火山学会秋季大会

9月20日(月)～22日(水)

場所：東北大学

東日本大震災被災地及び鳴子・鬼首・蔵王地域への現地討論会も予定。

<http://www.kazan-g.sakura.ne.jp/J/index.html>

注意：新型コロナウイルス感染拡大の影響により、行事中止の可能性もあります。実際の行事開催の有無については事前に各主催者、問い合わせ先にご確認ください。

お知らせ

日本地質学会ショートコース(第4回)開催します

今回は地質学のあり方や論文を書くことの本質について考える機会を提供します。多くの学生・若手研究者の皆様に受講していただきたいコースです。

日程：2021年7月18日(日)

内容：(各コース、講義・質疑応答含め2時間程度、延長の場合は最長3時間)

<午前>10:00-12:00「吾書くゆえに吾あり：論文執筆についての超個人的視点」磯崎行雄(東京大学)

<午後>13:30-15:30「地球科学の歴史から何を学ぶか」泊 次郎(科学史研究者)

参加費(各1日券)：会員2,000円(賛助会員に所属する方は会員と同額)/非会員5,000円

(注) 非会員の学部生・院生は「会員」料金に含まれます。

(注) 午前のみ、午後をみの受講の場合も、参加費の割引はありません。

開催方法：WEB会議システムzoom(<https://zoom.us/>)によるオンライン講義

定員：各コース100名

申込方法：学会HPの専用申込画面からお申し込みください。

詳しくは、学会HPをご確認ください。<http://www.geosociety.jp/science/content0134.html>

申込締切：2021年7月5日(月)

☆関東支部

報告

サイエンスカフェ
「VR!!地球科学のアソビカタ」実施報告

関東支部では毎年秋～冬に町中のカフェやレストランを会場として地質学会会員以外の一般の人を対象としたサイエンスカフェを実施してきた。今年度は新型コロナウイルス感染症のため、例年とは異なり仮想空間での実施となった。今年度のサイエンスカフェ「VR!!地球科学のアソビカタ」は地球科学可視化技術研究所の共催として、2021年3月21日17時～19時にバーチャルSNS“cluster”というインターネット上のサービスを用いた“ワールド”と呼ばれる仮想空間で行われた。ゲストスピーカーは芝原暁彦さん（地球科学可視化技術研究所）と今井拓哉さん（福井県立大恐竜学研究所）、ファシリテータは岡山悠子さん（科博SCA）に務めていただいた。参加者には事前登録をお願いしたが、当日フリーでも入ってこられる設定となっており、当日の参加者は34名前後（スタッフ含む）と例年のサイエンスカフェと同規模であった。

clusterを利用したことのない人には仮想空間での移動や動作に慣れない点が多いことが予想されたため、プログラムの始

る30分前から会場を開放して動きになれてもらうことにした。その際にはスタッフがフォローした。プログラムが始まり、会場内を移動していく頃になると皆わりとスムーズに動けるようになっていた。

仮想空間内の会場に入るとそこは草原状の広い空間となっていて、その中に建物がひとつあり、参加者はまず建物に入ってスクリーンの前に集まり、ワールド内での動き方やルールを知るのと、芝原さんと今井さんの自己紹介からスタートした。続いて建物内を移動しながら、実在する露頭の3次元モデルや、CTスキャンのデータから作成した有孔虫の3次元模型、恐竜の3次元骨格模型などを説明を受けつつ見て回った。参加者は自分のアバターを操作して露頭に登ったり、有孔虫をつかんで持ち歩いたり、恐竜骨格に登って上から風景を眺めることができた。さらに建物の外に出て青ヶ島の地形に集合し、地形の立体モデルの作成方法やデータの入手方法、精度などについての説明を聞き、その後は展示してある屋久島や富士山の模型の上を自由に歩き回った。最後は仮想空間の技術を用いた地球科学の楽しみ方について議論が行われた。

回線への負担を避けるため参加者からのコメントや質問は文字チャットに書き込んでもらい、その内容をファシリテータがピックアップして会場に紹介するという形を取った。このため参加者が多く混み合っているにもかかわらずそれほど混乱はなく、滞りなく

進行した。事後のアンケートによれば、地球科学関係者には仮想空間技術の可能性を、仮想空間になじみのある方には地球科学の面白さを楽しんでいただけたようである。なお地球科学関係者と一般の方の比率は2:1であった。軽妙なトークをしていただいた二人の恐竜学者の芝原さんと今井さん、イベント全体を安定感を持って進行してくださったファシリテータの岡山さん、参加してくださった皆様に御礼申し上げます。（産業技術総合研究所 小松原純子）



ワールドの様子。左：建物内の風景。参加者が露頭に登っている。左手前の白い部分は参加者のアバター。右：建物の外の様子。建物の手前に恐竜の骨格模型、左手奥に地形データから再現した実在の火山地形が見える。今井拓哉さん提供。

院生コーナー

研究室紹介
早稲田大学 堆積学研究室

中野有紗
早稲田大学創造理工学研究科
地球・環境資源理工学専攻博士課程1年

早稲田大学・教育学部・理学科地球科学専修は、地学専修として1964年に設立された。現在は、構造地質学研究室、惑星科学研究室、堆積学研究室、火山学研究室、進化古生物学研究室、地球化学研究室、衛星地球観測学研究室、地球物質科学研究室の8つの研究室が置かれている。学部生は1、2年次に各分野の基礎を学び、3年次よりいずれかの研究室に所属する。ちなみ

に、学部生の所属するこの地球科学専修は教育学部に属するが、大学院生の所属する地球・環境資源理工学専攻は大学院創造理工学研究科に含まれる。つまり、所属する研究室を同じくして大学院に進学した際には、所属が教育学部から創造理工学研究科へと変わるという、すこし複雑な仕組みとなっている。

今回は、筆者が在籍している堆積学研究室について紹介する。2009年より太田亨教授の運営する本研究室は、博士課程3名（留学生1人を含む）、修士課程5名、学部生13名の計21名が在籍している（2021年度）。本研究室では、堆積学・堆積岩岩石学を軸に地質時代の地球表層環境を読み取ることを目的として研究を行っている。用いる手法は、野外調査、薄片観察、鉱物・化学分析、多変量統計解析、機械学習などである。このように、採取した試料の分析データに統計学の手法を取り入れることで、堆積環境や古気候の復元、さらには新たな指標の開発も行っている。たとえば、堆積相と鉱物・化学組成に基づく白亜紀



写真1: イギリス東部ノースヨークシャーの沿岸に露出する前期ジュラ紀トアルシアン初期の浅海相。水平に近い緩やかな傾斜を持っているため、側方に歩いていくだけで連続的な層序が観察できる。

の東アジアにおける古気候解析、西南日本の後背地解析といった研究テーマに取り組んでいる。また、これらで用いるための指標開発を行うのが、多変量統計解析を用いた砂粒子の形状評価、石英粒子のカソードルミネッセンス特性を用いた源岩判別といったテーマであり、堆積岩から、その堆積場や源岩を判別することを目的としている。そして多くのテーマは野外調査とサンプリングを必要とし、本研究室では、特に実際に露頭を歩いて岩石をみることを基礎として重視している。調査対象地域としては、国内各地の堆積岩層に加えてイギリスや中国など、世界中を研究のフィールドとしている。調査後に実験室での分析やデータ解析を行うため、卒業論文や修士論文を執筆する学生は4月から9月に野外調査を実施する場合が多い。巡検や地質調査実習は経験しているものの、卒論生にとってはこれが初めての本格的なサンプリングとなる。そのため、先生に同行していただくのはもちろん、研究テーマの近い先輩には調査前から、計画の立て方や事前準備、岩石の採取方法などを教えてもらう。

ここで、私の野外調査での体験談を紹介したい。私の卒論テーマは、イギリス東部ノースヨークシャーにおいて、前期ジュラ紀に発生した海洋無酸素事変と大陸地殻風化作用との関係を明らかにすることであった。海洋無酸素事変は海洋の広範囲に有機炭素に富んだ黒色泥岩が堆積することで特徴づけられるイベントであり、風化作用の促進が要因のひとつとして考えられている。この仮説を検証するため、堆積岩試料の全岩化学組成を後背地風化指標に適用し、風化作用を定量化することが研究の目的だ。そのためにはまず、海洋無酸素事変の層準が分かっている露頭において、時間的連続性をもった岩石試料を採取する必要があった(写真1)。この調査では、現地の共同研究者が露頭を案内してくださることになっていた。イギリスへ向かう前には、どの層準からどれだけの岩石試料を採取するのか、どれくらいの時間が必要か等を慎重に検討するなど、準備は念入りにしたつもりだったが、調査計画を英語で説明することには不安があった。私は英語が得意でもなければ海外経験もなく、英語のネイティブスピーカーとコミュニケーションをとった経験はほとんどなかった。今思い返してもたどたどしい話し方であったと思うが、私は必死にコミュニケーションを試みた。相手がじっくりと私の話を聞いてくれたおかげで、何とか計画を伝えることができた。打ち合わせを終えて、いよいよ露頭に向けて出発した(写真2)。露頭に到着し、調査と岩石試料のサンプリングを始めたようとしたところで、私は、なんと、サンプリング袋を持っていないことに気がついた！幸いなことに、共同研究者が予備の袋を持っていて、それを快く譲ってくれた。そのおかげで、私たちは予定通りフィールドワークを行うことができ、無事卒業論文に必要な岩石試料を採ることができた。この経験から、私は野外調査へ向かう際は毎回必要なものをリ



写真2: 沿岸の露頭へ向かう道。多くの地質学者が訪れる場所であり斜面にはロープが固定されている。急傾斜の崖であり、上り下りした翌日は筋肉痛で足が上がらなかった。

ストアップし、露頭へ行く前に必ず持ち物を再確認するようになった。調査対象地域の海岸線沿いの露頭では、潮が満ちると道が海面下に沈んでしまう。そのため潮位の良い日においても、午後三時には調査を終える必要があった。調査後の夕方の時間は試料の整理や翌日の準備、食事も含め必要なものの買い出しに当てた。そして調査最終日の夕方は、ヨークの博物館へ向かうことにした。調査対象地域は古くから多くの地質学者が訪れた場所であり、博物館にも今回研究対象とした地層から産出したアンモナイトやベレムナイトなどの化石資料が数多く展示されていた。さらに、博物館では思いがけず、ウィリアム・スミスの作成した世界初のイギリスの地質図にお目にかかることもできた。

学年が上がるにつれて後輩の調査に同行することも増え、経験値が増したようにも感じた。しかし、先生、先輩と共にフィールドを歩くと、まだまだフィールド調査において学ぶことがたくさんあると実感する。例えば、これはサンプリングに適した露頭を探していたときのことだ。先生は道路の反対側にある露頭(10メートルは離れていた)を見ながら、「あれは礫岩だね、見てごらん」とおっしゃった。この距離でも数センチメートルに満たない礫のひとつひとつが見えるのだろうかと思い、私は思わず「え？見えるんですか？」と声が出た。「目を細めてじーっと見れば見えるよ」と先生。私は必死に目を細めて10m先の露頭を凝視した。しかし先生は隣で笑っていた。礫が見えるというのは冗談で、周囲の砂岩や泥岩よりも固い礫岩は風化浸食に強く、その結果が露頭面の凹凸に現れる。この経験から、フィールド調査の際には、1点に集中するのではなく視野を広く保ちつつ露頭全体を観察する手法、その一方で、地質図の示す岩相変化を参考に鉱物スケールでの岩体の観察といったよりフォーカスした観察手法のように、露頭を見るスケールを自在に調節する必要があることを改めて学んだ。

本研究室では、このように野外調査に基づいた古環境解析を行う一方、その精度を向上させるための新たな指標の開発も行っている。学生の中には様々な得意分野を持つ者がおり、活発な議論を交わしながら、楽しみながら、切磋琢磨しながら日々研究を行っている。

常時投稿をお待ちしています。編集は、現在以下の4名で行っています。原稿は1500～5000文字程度、図・写真3点以内を目安に、e-mailでお送りください。

7160.nonnn@gmail.com
a.sakuma@eps.s.u-tokyo.ac.jp
dkuwano@chiba-u.jp
90rymenjgpr@gmail.com

大山 望(九州大)
佐久間杏樹(東京大)
桑野太輔(千葉大)
時永万音(新潟大)

学 会 記 事

2020年度第4回理事会議事録

日時：2020年12月5日（土）14:00～17:00

【Web会議形式】

出席役員 理事（45名）：上松（渡邊）佐知子・芦 寿一郎・天野一男・磯崎行雄・ウォリス サイモン・内野隆之・大藤 茂・岡田 誠・緒方信一・尾上哲治・笠間友博・狩野彰宏・亀田 純・亀高正男・川端清司・北村有迅・清川昌一・小松原純子・小宮 剛・齋藤 真・坂口有人・佐々木和彦・杉田律子・高嶋礼詩・竹下 徹・辻森 樹・内藤一樹・中澤 努・納谷友規・西 弘嗣・根本直樹・野田 篤・早坂康隆・平田大二・藤井正博・星 博幸・細矢卓志・保柳康一・松田達生・松田博貴・道林克禎・矢島 道子・矢部 淳・山口飛鳥

監事（2名）：岩部良子・山本正司
欠席役員 理事（4名）：安藤寿男・亀尾浩司・後藤和久・奈良正和・三田村宗樹

- * 成立要件：理事総数 49名の過半数 25名 本日の出席者44名で本理事会は成立。
- * 議決：出席者の過半数 23名
- * 開催にあたって、納谷理事および亀田理事を書記に指名した。

報告事項

1. 執行理事会報告

- ・中澤常務より、2020年度第5回、6回執行理事会議事録より、主要な点の報告があった。
- ・会員動静の報告があった。2020年12月5日現在：3283名（前年比-168）。（緒方理事）
- ・名古屋大会代替企画（各担当者）：Webを使った表彰式、ショートコース、サイバーシンポジウムがいずれも盛況のうちに終了したとの報告があった（星理事）。ジュニアセッションの実施報告（高嶋理事）、キャリアビジョン誌の刊行（坂口理事）について報告があった。磯崎会長から、WEBの発信力を再認識している。ショートコースなど会員に有益なWEB 企画を今後も継続して行っていきたい旨コメントがあった。

2. 理事・委員会・研究委員会等の報告

1) 総務委員会（亀高理事）

- ・会員管理のクラウドシステム導入案、収支改善策、会員増加策を検討中であること、また他学会行事支援形態について概定されたことが報告された。主な報告内容は以下の通り。

（会員管理へのクラウドシステム導入案）新規システムの具体的な内容と、現状の会員管理システムと比較した保守管理費用などについて説明があった。

（収支改善策）いくつかの検討・試算を行った。事務所のコスト削減（移転による事務所コストへのメリットはなく、まずは書籍整理

によるスペースのスリム化を図る）／印刷費の削減（地質学雑誌の電子化・オンデマンド化による700万円前後の削減）／対面・web会議の併用による削減（対面会議を減らすことにより50-80万円/年の削減）

（会員増加策）タスクフォース（TF）を設置して、早急に検討を進める。

（行事支援形態の概定）迅速かつ適切な行事支援が行えるように、判断・承諾の基準とその流れが確認された。また杉田理事より、国際会議や海外学協会への行事への協力のために、「共催」「後援」等の英語表記も検討してほしい旨の要望があった。

・書籍整理に関連して北村理事より地質学雑誌以外の学会出版物のアーカイブ化（地質学論集など）について要望があった。また会員増加策TF に対して、竹下理事から、会員の意見聴取や実態把握が重要であることから大規模アンケートの実施提案があった。

2) 地質学雑誌編集委員会（大藤理事）
最近の編集状況について報告があった。11月以降投稿数が減少傾向にある。

3) Island Arc編集委員会（狩野理事）
最近の編集状況について報告があった。11月以降投稿数が減少傾向にある。地質学雑誌とともに、積極的な投稿が呼びかけられた。

4) 各賞選考委員会（竹下理事）
応募状況について報告された（12/1締切）。学会賞1件、国際賞1件、小澤賞2件、棚山賞3件、研究奨励賞2件、論文賞 6件、小藤文次郎賞3件、学会表彰3件

5) 地質災害委員会（松田理事）
来年の1月14日に開催されるシンポジウム「東日本大震災からの十年とこれから-58学会、防災学術連携体の活動-」に地質学会として発表申込を行ったことが報告された。「東日本大震災後の古津波堆積物研究の現状と将来展望」（後藤和久；日本地質学会理事・東京大学）

6) 構造地質部会のオンライン例会開催報告（重松部会長）

10/7-9に、Zoomを用いたオンライン例会を開催した（参加者はのべ150名以上）。Google formによる参加登録、Zoomによる講演、チャット機能による質疑などが円滑に行われたこと、発表後の質疑の時間や場をどう設けるかといった課題点について報告があった。

7) 関東支部の表彰制度について（中澤常務理事）
支部規則（優秀発表賞の支部規則・顕彰規則）を改定することが報告された。来年4月の関東支部総会にて最終承認の上施行される。

審議事項

1. 2020年度事業報告（案）（磯崎会長）
今年度事業報告案が示され、承認された。
2. 2021年度事業計画骨子（案）（磯崎会長）
次年度事業計画案が示され、承認された。
3. 「ジオパーク・コンソーシアム（仮称）」

設立への協力について（天野理事）

地質学会として積極的に協力していくことが確認された。また西理事より、海外では、地質学の社会への普及という観点から学会が主導的に関与している例があり、日本地質学会も積極的に協力すべきとの意見がだされた。

4. 名誉会員推薦委員会委員の選出・承認（佐々木副会長）

階層別の委員案が示され、承認された。加えて、理事会代表委員として保柳康一理事を選出した。

5. 理事会規則第10条 執行理事会における「定足数および議決」の変更（佐々木副会長）
従来は、開催回数の多い執行理事会成立のため、委任を認める代わりに定足数を3分の2以上と厳しく設定していたが、WEB 会議活用による出席率の確保により、定足の規則を理事会と揃えることがガバナンス上適切であるとの説明があり、変更案は原案の通り承認された。

変更箇所は以下の通り。

現行：（定足数および議決）

第10条 執行理事会は、構成員の3分の2の出席をもって開催が成立する。

2 執行理事会の議決に対して事前に書面ないし電磁的方法により、意思の表明あるいは委任状を提出した者は出席とみなす。

変更案：（定足数および議決）※理事会規則を準用する。

第10条 執行理事会は、構成員の過半数の出席がなければ、会議を開くことができない。

2 執行理事会の議決は、議決に加わることができる執行理事の過半数が出席し、その過半数をもって決する。

6. 男女共同参画委員会規則および関連する理事会規則条文の変更（藤井理事・中澤常務）
委員会の名称変更（男女共同参画委員会→ジェンダー・ダイバーシティ委員会）とこれに関連した委員会規則、理事規則の変更案が示され、原案の通り承認された。

7. 表彰制度の見直しについて（学会運営規則および各賞選考規則の改正案）（磯崎会長）

表彰制度の改正案とこれに関連する運営規則の変更案が示され、大筋で承認された。年齢制限などの推薦対象が変更になる賞については、移行期における不利益が生じないように特例措置を検討する。これについて、斎藤理事より、移行期間の特例措置をどこかに明記しておくべきとの意見があった。また、改正案では従来の「功労賞」の対象が「学会表彰」に統合され、同じ「功労賞」という名称の別の賞が新設されることになるが、従来の「功労賞」と区別するために名称を工夫してはどうか（例えば「功績賞」など）といった意見があった。これについては、執行理事会で検討することとした。

8. 総会の日程について（中澤常務）

2021年度代議員総会は、6/12（土）開催予定。

9. その他

・シニア会員制度について：磯崎会長より、

シニア世代に向けた方策の検討を開始する旨のアナウンスがあった。コストのシミュレーションを含め、総務委員会で検討する。

・地質学雑誌のJ-STAGEでの公開時期について：山口理事より、若手研究者から早期公開（現状では掲載から3ヶ月後に公開）の要望があることが紹介された。

2020年12月21日
理事：議長 道林克禎
理事：副議長 山口飛鳥
代表理事：会長 磯崎行雄
(以下、出席理事氏名省略)

2020年度第10回執行理事会議事録

日程：2021年3月15日（月）13:00～17:45

【WEB会議】

出席者：磯崎会長・平田・佐々木・中澤・緒方（14-15時、16時以降）・辻森・星・坂口・小宮・大藤・狩野・高嶋

欠席：岡田・亀高・矢部・松田・ウォリス
事務局 澤木

＊定足数（過半数：9）に対し、12名の出席
＊前回議事録（20-9回）の確定。

報告事項

1. 全体の報告

・「学協会における研究公正に関する取組と現状」調査依頼があり、回答した（国立研究開発法人日本医療研究開発機構平成31年度研究公正高度化モデル開発支援事業助成課題「研究公正の推進に資する質問紙調査の活用に関する研究」、開発代表者：大阪大学准教授 中村征樹）。

・地質学雑誌電子化の方針・検討状況について執行理事会名で周知・広報を開始した（3/2geo-flash）（学会運営タスクフォース：中澤）

・若手会員に対して意向動向調査のためのアンケートを実施中。344通送信43通不達＝301件依頼。実施期間：2/25-3/31。（坂口）

2. 運営財政部会（緒方・亀高）

1) 総務委員会

＜共催・後援依頼、他団体の募集等＞

・三重県総合博物館第28回企画展「やっぱり石が好き！三重の岩石鉱物」（会期：4/24～8/29）への後援名義使用依頼があり承諾した。

・令和3年度消防防災科学技術賞募集（消防防災科学論文ほか）（4/22締切）【→ニュース誌3月号、geo-flash掲載】

・令和2年度東レ科学技術賞および東レ科学技術研究助成受賞者決定通知あり、地質および会員関係者の受賞なし。令和3年度の推薦募集は6月中旬開始予定。

＜会員＞

(1) 今月の入会者(4名)

正（院割）会員（3名）：栗山湧生・伊左治良輔・木村陽介

正（学部生割）会員（1名）：中山瀬那

(2) 今月の退会者（2名）

正会員（2名）：大西由梨・諸野祐樹

(3) 今月の逝去者(1名)

正会員（1名）：岡田賢樹（逝去日2021年1月22日）

(4) 2021年2月末会員数

賛助：27、名誉：41、正会員：3364〔うち正：3275、院割：86、学部割：3〕

合計3432（昨年比-169）

(5) 2021年度50年会員顕彰者（43名）

赤井静夫・荒井章司・石井正之・永広昌之・大槻憲四郎・大場孝信・岡孝雄・岡村眞・奥田義久・金井克明・北里洋・木戸道男・君波和雄・楠田隆・小早川隆・小宮山梓・笹田政克・佐藤和志・佐藤隆春・佐藤隆英・柴田徹・菅谷正美・高橋明・高橋治郎・高安克己・武島正幸・立石雅昭・徳山英一・中井均・中野聰志・仲谷英夫・新井田清信・二階堂章信・萩原茂・橋本修一・濱塚博・平林憲次・別所孝範・方達重治・安野敏勝・安松貞夫・山本尊仁・和田信彦

＜会計＞

・決算予想および2021年度予算案（→審議事項へ）

＜その他＞

・会員管理のクラウド化：タスクフォース会議での方針に沿ったクラウドシステム契約書案を検討中。契約し3月末からクラウドシステムへの移行準備を始める予定。

・事務局賃貸の契約（井桁金網（株））を更新予定（2021/4/1～2023/3/31）。賃料変更なし、更新料251,300円（税抜）

3. 広報部会（坂口・小宮）

1. 広報委員会（坂口）

・第12回フォトコンテスト審査をWEB上での作業中。3/16終了予定。

・代替企画のキャリアビジョン誌（PDF）をホームページ上で公開した。

・学会SNS対応（→審議事項へ）

4. 学術研究部会（辻森・ウォリス・星）

1. 行事委員会（星）

・今回のショートコースの内容について検討状況が紹介された。「津波堆積物」をテーマに5月中旬開催予定。

・2021年学術大会（名古屋）

①トピックセッションの募集を締切った（3/10締切）。新規申し込みはなく、昨年中止となった7件のセッションを改めて採択した。

②地質情報展は、当初9/24-26開催を計画していたが、会場である名古屋科学館の都合により開催時期を10月初旬に遅らせる。市民講演会に変更なし（9/5開催、於名古屋大学）。

③学術大会（名古屋大会）オンライン開催の収支（→審議事項へ）

④学術大会（名古屋大会）でのオンラインシ

ンポジウム開催提案（→審議事項へ）

2. 専門部会連絡委員会（辻森）

・部会規則整備と年次活動を各部会に依頼中。4月理事会で報告予定。（未回答1部会：層序）

・環境地質部会・久部会長急逝に伴い、田村嘉之新部会長が就任（任期は21年9月名古屋大会まで）することとなった。また、環境地質部会と地質環境の長期安定性研究委員会（委員長 吉田英一）との合流を協議中との報告があった。専門部会および研究委員会から提案があたり次第審議する。

3. 国際交流委員会（ウォリス）

IGC韓国大会についての進捗を確認する。

4. 地質標準化委員会（辻森）

特になし

5. 編集出版部会（大藤・狩野）

1) 地質学雑誌編集委員会(大藤)

(1) 編集状況報告（3月10日現在）

・2021年投稿論文：3〔内訳〕論説2（和文2）、口絵1（英文1）

査読中：26 受理済み：19（うち特集号11案内書2）

・127巻3月号：特集号「富山トラフと周辺部の堆積作用と後背テクトニクス（その2）」論説3、通常号 レター1（62頁 校正中）

・JSTが運用する論文関連データの公開システム（J-STAGE Data）への移行や、J-STAGEでの論文の全文XML公開などの検討を開始した。近日JSTとの意見交換会を開催予定。

2) アイランドアーク編集委員会(狩野)

(1) 編集状況報告

(2) その他

出版状況とIFの今後の見込みの報告に加え、最近の投稿者像、ダウンロード読者像などの解析結果が報告された。

3) 企画出版委員会（小宮）

・ゆめ基金助成事業「ボクたちの“足もと”から地球のことを知ろう（WEB教材）」の普及・利用状況報告書（3年目）を国立青少年教育振興機構へ提出予定（提出期日4/10）。今年度はコロナ禍の影響で普及活動は実施されず、一部教材広報用パンフレットの配布のみに留まった。

6. 社会貢献部会（松田・矢部・高嶋）

1) 地学教育委員会（高嶋）

・大学入試センターへ地学関連科目の問題作成および得点調整に関わる意見書（2/22付）に提出した。

2) 地質技術者教育委員会（佐々木）

①3/7（日）JABEEオンラインシンポジウムを開催。

・Zoom申込111名（講演者などを含む）、当日Zoom視聴67名、YouTube34名の計101名が視聴。Youtubeに3時間半の録画を掲載中。Youtube総視聴回数241回（3/11、14時現在）

・大学、企業、学生と異なる立場からJABEEとCPDについて講演。

- ・討議も多く、盛況であった。
- ・地質学会としてJABEEやCPDの広報を大学や企業さらには高校にまで広める必要があるとの意見があった。
- ・事前申込111名の状況は以下のとおり。
会員39%、非会員61%
大学18%、企業69%、官公庁・学協会6%、その他6%
CPD単位認定証必要67%、不要33%
- ②JABEE審査
 - ・5月からWEBによる実地審査
- ③JABEE地球・資源分野運営体制
 - ・3/31の分野運営委員会で議論する予定。
- ④CPD
 - ・ジオスクーリングネット協議会会合は3/16WEB開催予定
- ⑤委員会のHP刷新
 - ・3月中に刷新予定
- 3) 生涯教育委員会（矢部）
 - ・文科省より令和3年度(第62回)科学技術週間および周辺でのイベント実施とその情報提供の依頼があったので、学会HPの情報を提供した。
- 4) 地震火山地質こどもサマースクール（松田）
 - ・2/20（土）サマस्क3学会連合企画委員会開催（松田出席）。地質学会から2020年度の20万円振込を確認した。決算は3月締めのため、4月以降に報告して頂く。
 - ・2020年から2021年に延期となった浅間山サマस्कは、1泊2日で東海大宿舎を会場に開催を検討しているが、今後の新型コロナの感染状況を鑑みて判断する。
 - ・再来年度（2022年）の開催地応募者はなかった。今後、募集のやり方を変更し、年度を特定しない方法にする。（開催する意思がある組織、団体を募集し、実際に実施する時期は調整した上で決定する）
 - ・次回の会議は、3/27（土）の予定。
- 5) 地質の日（矢部 代理松田）
 - ・「地質の日オンライン一般講演会」を5/9に開催する。演者は岡田誠氏（茨城大学教授）「地質年代チバニアンと房総の地質」および氏家恒太郎氏（筑波大学准教授）「断層の地質学的研究から読み解くプレート沈み込み帯地震発生の科学」。学会HP、ジオフラッシュおよびチラシでの広報も開始した。全国科学系博物館協会、全国地質調査業協会連合会等への広報協力依頼を行った。
 - ・「地質の日」実行委員会事務局で今年の広報用ポスター（添付資料）を制作した。3月中旬をめどに各機関に配布の予定。
 - ・「地質の日」街中ジオ散歩について、2/23（火）に関係者によるオンライン会議を行い、今年の行事実施について議論した。新型コロナウイルス感染症の状況を踏まえ、5月の実施は延期とし、9月ないし10月での実施を検討する。6月中に再度会議を開き、実施の可否を判断する。
 - ・過去のジオ散歩の内容等についてアーカイ

- ブの整備を進めることとする。6月の会議までに各回の担当がそれぞれ資料の制作を進める。
- 7. その他執行政理事会の下に設置される委員会
 - 1) 利益相反マネージメント委員会（中澤）特になし
 - 8. 理事会の下に設置される委員会
 - 1) ジオパーク支援委員会（委員長天野：代理平田）特になし
 - 2) 地学オリンピック支援委員会（高嶋）
 - ・例年同様地学オリンピック本選参加者への学会PRツール（クリアファイル等40セット）を提供した。今年は本選後参加者に郵送される。
 - 3) 支部長連絡会議（平田）特になし
 - 4) 地質災害委員会（松田）
 - ・令和3年2月福島県沖の地震に関する災害情報（リンク）を学会HPに適宜掲載した。
 - ・防災学術連携体臨時総会および法人設立準備会臨時総会（2/26：Zoom開催）があり、中澤常務が出席した。法人設立にあたり改めて正会員の入会手続きを行った（年会費3万円）。
 - ・「東日本大震災から10年」の会長談話を発表（2月号ニュース誌、HP掲載）
 - 5) 名誉会員推薦委員会（佐々木）
 - ・候補者推薦が2月10日に締め切られ、3名の推薦があった。委員会によるメール審議、投票により、3名を名誉会員候補として、4月の理事会、6月の総会に諮る予定
 - 6) 各賞選考委員会（中澤）
 - ・選考作業中(zoomで実施)。
 - 7) ジェンダー・ダイバーシティ委員会（委員長堀 利栄：代理中澤）
 - ・日本地質学会賛助共同参画の歩み2020verをとりまとめ、学会HPに掲載した。この30年間の日本地質学会の男女共同参画の状況の解析結果が報告され、今後の更なる取組の必要性が確認された。
 - ・2021年度活動計画として、学術大会セッションでのEDI ロゴマークの付与、ワークショップ開催、男女共同参画学協会連絡会へのオブザーバー参加を予定している。
 - 8) 法務委員会（委員長 松田博貴：代理中澤）
 - ・行動規範の改定案を会長へ答申した。（→審議事項へ）
 - 9) 連携事業委員会（中澤）特になし
 - 9. 研究委員会
 - 1) 地質環境長期安定性研究委員会（委員長吉田英一）特になし
 - 2) 南極地質研究委員会（委員長 小山内康人）特になし

I 審議事項

1. 行動規範の改訂案
法務委員会から答申された改定案を審議し、「倫理綱領」の求める行動を地質学会に適合した形で明確にする答申案を了承した。
2. 地質学会のSNS対応提案（坂口）
会員を中心とする関係者を対象に、迅速な連絡網としてgeo-Flashのオプションとしての位置付けで公式SNSの利用を開始するという提案を了承した。準備が整い次第Face BookとTwitterを開始する。
3. 2020年度決算案・2021年度予算案
コロナ禍の影響によりイレギュラーな対応が多かった2020年度の各事業に関する収支について、丁寧に確認した。中期的な会員動向を含めた今後の予算見通しも踏まえた上で、2021年度予算案を審議した。提案された2020年度決算案および2021年度予算案を了承し、理事会に諮ることとした。
4. 2021年学術大会関係（星）
 - ・学術大会（名古屋大会）オンライン開催の収支予想等について
オンライン開催の場合の詳細な収支計画が提案された。これに加えて、従来以上に参加者を増やし、大会を盛り上げるための方策が議論された。追加の提案を含めて行事委員会で検討し、執行政理事会メールで議論の上で理事会に諮ることとした。
 - ・学術大会（名古屋大会）でのオンラインシンポジウム開催提案について
地球科学系学術学会の将来像について関係学協会と討議することが提案された。まずは関係者で意見交換を行って、情報共有と課題の抽出から始める方向で進めることとした。
5. 地質学雑誌電子化について（学会運営タスクフォース：中澤）
具体的なスケジュールと手順が提案された。新しい会員サービスにおける地質学雑誌の位置付けと完全電子化のあり方を議論し、具体的な課題と対応策を取りまとめて理事会に諮ることとした。
6. 4月理事会審議事項
審議事項として下記を確認した。
 - ①2020年度事業実施概要
 - ②2021年度事業計画
 - ③2020年度決算概算
 - ④2021年度予算案
 - ⑤行動規範の改定
 - ⑥表彰制度見直しに係る学会運営規則及び各賞選考規則、各賞選考委員会規則の改定
 - ⑦各種専門部会規則の承認
 - ⑧名誉会員候補者の選出について
 - ⑨各賞受賞者の決定
 - ⑩総会議案の決定
 - ⑪名古屋大会開催方法について
 - ⑫地質学雑誌の電子化について
 - ⑬その他
7. その他
「県の石」の出版に関して
編集が停滞している状況を確認した。辻森理事がコンテンツの整備をリードして早期の刊行を目指すこととした。

以上

2021年4月3日
一般社団法人日本地質学会執行理事会
会長（代表理事）磯崎行雄
署名人 執行理事 中澤 努

2020年度第11回執行理事会議事録

日程：2021年4月3日（土）10:00～12:30

【WEB会議】

出席者：磯崎、中澤、佐々木、平田、岡田、松田、高嶋、矢部、ウォリス、辻森、星、亀高、坂口、大藤、小宮、狩野、緒方

欠席：なし

事務局 澤木

*定足数（過半数：9）に対し、17名の出席

*前回議事録（20-10回）の確定。

報告事項

1. 全体的報告

- ・若手会員に対しての意向動向調査アンケートを実施した（実施期間：2/25～3/31）。75名回答（回答率25%）。結果を取りまとめてニュース誌にて報告予定。地質系の大学に進学はするが、高校での地学履修率が低いことに対して、高校地学の理系向け開講は難しいので、地理学分野との連携なども今後必要ではないかとの意見があった。また、多くの学生がの自費で学術大会に参加しており、若手が特に学会巡検に参加しやすいよう、学会補助してはどうかなどの意見があった。
- ・2021年度の市民講演会「動物の進化を探る-古生物学の世界-」および地質情報展2021あいち に対する科研費は不採択となった。来年度予算案に追加支出が必要となるため、新たに引当金から計上する旨を本日の理事会で承認を頂く。

2. 運営財政部会（緒方・亀高）

1) 総務委員会

＜共催・後援依頼、他団体の募集等＞

- ・筑波大学より2021年度朝永振一郎記念第16回「科学の芽」賞に対する後援名義使用依頼があり、承諾した。
- ・第12回日本学術振興会育志賞候補者学会推薦の依頼（受付期間5/27-6/1）【→ニュース誌4月号、geo-flash掲載】
- ・東レ科学振興会より令和2年度贈呈式延期の連絡があった（地質学関連の受賞者・受領者なし）。
- ・2023年以降開催藤原セミナーの募集案内（締切：7/31）【→ニュース誌4月号、geo-flash掲載】
- ・株式会社地圏総合コンサルタントより社長交代のご連絡があった。代表取締役社長西柳良平氏

- ・一般社団法人資源・素材学会より会長、副会長選任のご連絡があった。会長 高橋弘（東北大学）

＜会員＞

1. 今月の入会者(7名)
正会員（1名）：中瀬千遥
正（院割）会員（6名）：宮崎裕博・ニゴンビマブングラリッサ・榎丸優香・橋本 駿・関海都・箱守 貴
2. 今月の退会者
2020年度末退会者：88名、除籍者：59名
3. 今月の逝去者(2名)
名誉会員（1名）：三梨 昂（逝去日2021年3月25日）
正会員（1名）：中里俊行（逝去日2020年9月14日）
4. 2021年3月末会員数
賛助：27、名誉：40、正会員：3217〔正：3131、院割：83、学部割：3〕合計3284（昨年比-162）

＜その他＞

- 特になし
- 3. 広報部会（坂口・小宮）
 - 1) 広報委員会（坂口）
 - ・第12回フォトコンテスト審査結果発表。画像、講評等は近日HP公開予定。表彰式は行わない。5/4-5/17東京パークスギャラリー（上野公園内）にて展示予定。
 - ・学会Q & Aに新規質問が3件あった（3/16～4/2）。返答を作成し、確認中。
 4. 学術研究部会（辻森・ウォリス・星）
 - 1) 行事委員会（星）
 - ・本年の名古屋大会は、現地開催行事とオンライン行事の組み合わせにする。会期は4日間の予定（9/4～7）で、口頭発表申込数によっては3日間になる可能性あり。現地開催行事（シンポ、市民講演会）は9/5（日）。トピック・レギュラーセッションはZoomを利用したオンライン方式。ポスター発表はConfitのe-Posterを利用。オンライン懇親会も実施する。
 - ・来年（2022年）の東京・早稲田大会について、関東支部から日程、LOCメンバー、巡検案等について連絡があった。日程は9月4日～6日または9月11日～13日。巡検コースの詳細について今後検討を進め、秋の理事会までにコースを確定させる。
 - ・2023年は近畿支部、2024年は東北支部での開催を打診する。
 - 2) 専門部会連絡委員会（辻森）
 - ・現行地質部会が解散予定。理事会承認事項。
 - 3) 国際交流委員会（ウォリス）
特になし
 - 4) 地質標準化委員会（辻森）
特になし
 5. 編集出版部会（大藤・狩野）
 - 1) 地質学雑誌編集委員会(大藤)
 - (1) 編集状況報告（3月31日現在）

- ・2021年投稿論文：5〔内訳〕論説4（和文4）、口絵1（英文1）
査読中：26 受理済み：20（うち特集号11案内書2）
- ・127巻3月号：特集号「富山トラフと周辺部の堆積作用と後背テクトニクス（その2）」論説3、通常号 レター 1（62頁、3/31発送済）
- ・127巻4月号：特集号「堆積学、堆積地質学の日本における進展と展望、最近25年を中心として（仮）」総説3、通常号 レター 1、報告1（50頁、入稿中）
- 2) アイランドアーク編集委員会(狩野)
 - (1) 編集状況報告【理事会報告資料02】
 - ・順調に投稿・受理が進んでいる状態。ただし半数が特集号なので、新たな特集号企画が必要。
 - ・本年度、ワイリーより印税200万円程度が地質学会の収入となる（例年並）。
 - ・2021年のIF値は、1.6→1.3程度に下がると予想されるが、誤差の範囲程度と考えている。
 - 3) 企画出版委員会（小宮）
 - ・ゆめ基金の事業が2020年度で終了した。WEB教材使用は引き続き可能。内容の更新・修正などを業者に依頼する場合は、別途業者への発注が必要となる。
 6. 社会貢献部会（松田・矢部・高嶋）
 - 1) 地学教育委員会（高嶋）
特になし
 - 2) 地質技術者教育委員会（佐々木）
(1)4月2日に2021年度第1回委員会開催
(2)2020年度の活動報告
 - ①Zoomによる委員会を3回開催。それ以外にメーリングリストによる意見交換を月1回ペースで実施。
 - ②JABEE関連活動の充実
 - ・3月7日（日）JABEEオンラインシンポジウムを開催。Zoom申込111名（講演者などを含む）、当日Zoom、Youtube計101名が視聴。大学、企業、学生と異なる立場からJABEEとCPDについて講演。討議も多く、盛況であった。シンポ録画はYoutubeに掲載中（4月2日現在350を超える閲覧）。当日対応できなかったQ&AをHPに掲載。また、アンケート結果を近々 HPに掲載予定。
 - ・2021年度に以下の事業を実施することを検討中。
高校生を対象としたJABEE&CPD広報：地球科学を学ぶことは地質技術者という社会を支える重要な仕事につながることであり、そのためにJABEE制度や技術士制度があることを、全国の800校の高等学校の進路指導室にポスターなどを配布して理解を深めてもらい、同時に生徒に地質学に興味をもってもらう。その第一段の事業。JABEE校から協力金をいただき、収支が学会財政に影響がないようにする。/ JABEEカリキュラムに係るオンラインシンポジウム：フィールド教育やデザイン教育などJABEEプログラムで重要なカリキ

ュラム内容について、複数のJABEE校から紹介と議論を行う。/2020年度のJABEE継続審査に多くの審査員を学会から推薦し対応中。/地球・資源分野の運営体制についての議論に参画。現在検討中。

③技術者継続教育（CPD）の環境整備

・CPD単位の認証方法などについて支部などに説明。

・学会が属するGEO-Net協議会活動に積極的に参画

④学会HPの刷新：これまでの内容を大幅に刷新し、記載内容を充実させた。

⑤委員の改選：2年の任期が2021年5月末に終了。委員継続を前提に新委員の加入などを検討し、6月の理事会に委員を諮る予定。

3) 生涯教育委員会（矢部）

特になし

4) 地震火山地質こどもサマースクール（松田）

3/31開催の運営会議では、火山学会からは、拠出金に見合った火山学会、火山学の普及がなされているか、見える化の要望があったとのこと。地質学会も同意見。今後サマースクール実施を積極的にマスコミに取り上げてもらうなど、より広報・普及に関する検討を進めるべきとの意見があった。

5) 地質の日（矢部）

オンライン一般講演を実施する（3月執行理事会報告）について本日の理事会で説明。周知する。

7. その他執行理事会の下に設置される委員会

1) 利益相反マネージメント委員会（中澤）

特になし

8. 理事会の下に設置される委員会

1) ジオパーク支援委員会（委員長天野：代理平田）

特になし

2) 地学オリンピック支援委員会（高嶋）

・3月20日16-18時にウェブ会議を開催し、日本地学オリンピックの予選問題・本戦問題に関する講評を行うとともに、今後の活動計画を議論した。

・今年度の出題に関していくつかの表現上の問題点（選択肢で「最も不適切なものを選ぶ」など）や、史上初のWeb開催となったことから、例年とかなり異なる出題方法であった点が指摘されたが、基本的には良く練られた良問であったと評価した。各予選、本選の試験問題、解答、結果については地学オリンピック日本委員会のサイトに掲載されている（<https://jeso.jp/index.html>）。

・2020年の国際大会は中止となったが、地学オリンピック（日本）の上位15名に対して、文部科学大臣からの特別賞が授与されたことが、久田健一郎先生より説明があった。

・2021年の夏の国際大会については、本選の上位得点者4名の出場が決まったが、国際大会もオンラインでの実施が計画されてい

る。

・地学オリンピックのPRポスターを学術大会の何らかの場面で掲載できないか打診があった。ポスターは例年8月末に出来上がる。これまではジュニアセッション会場で貼られていたが、今年は大会がオンラインでの実施のため、ジュニアセッションの募集のサイト（Web上およびニュース誌）や地質学会のWebsite、ジオフラッシュなどへの掲載を検討する。

3) 支部長連絡会議（平田）

東北支部のWebコンテンツが好評。学会全体としてWeb戦略を練り、学会広報を進めるべきとの意見があった。

4) 地質災害委員会（松田）

特になし

5) 名誉会員推薦委員会（佐々木）

特になし

6) 各賞選考委員会（中澤）

今後より公平な審査が進むように、賞の推薦方法（専門部会からの推薦方法など）を執行理事会で検討してほしい旨要望があった。

7) ジェンダー・ダイバーシティ委員会（委員長堀 利栄；代理 中澤）

特になし

8) 法務委員会（委員長 松田博貴；代理 中澤）

特になし

9) 連携事業委員会（中澤）

特になし

9. 研究委員会

1) 地質環境長期安定性研究委員会（委員長吉田英一）

特になし

2) 南極地質研究委員会（委員長 小山内康人）

特になし

I 審議事項

1. 理事会議事の確認

2. その他：ワイリーからのIsland Arc賞賞金が廃止される（2022年度より）ことや学会財政難の状況を鑑みて、今後各賞の賞金の廃止、見直しが早急に必要との議論があった。継続審議とする。

以上

2021年5月8日

一般社団法人日本地質学会執行理事会

会長（代表理事）磯崎行雄

署名人 執行理事 中澤 努



名誉会員 三梨 昂先生のご逝去を悼む

日本地質学会名誉会員、元島根大学教授の三梨 昂先生は2021年3月25日享年95歳にて逝去されました。ご葬儀は新型コロナウイルス感染症拡大の最中のためご親族だけで行われました。3年前に奥様がお亡くなりになったばかりでしたので、ご遺族のお悲しみはいかばかりかと心より哀悼の意を表します。

三梨先生は1927年（昭和2年）樺太でお生まれになり、1948年（昭和23年）に旧制秋田鉱山専門学校採油科（現秋田大学国際資源学部）をご卒業後、同年5月商工省鉱山局地下資源調査所（のちの通産省工業技術院地質調査所）に入所、燃料部石油課に配属されて本邦油田・ガス田地域の調査研究に従事されました。この間、1961年に北海道大学より理学博士の学位を授与されています。1979年4月からは後進指導のため島根大学理学部地質学教室教授に異動され1990年に退官されました。

これまで地質図を含む100編余の研究論文をさまざまな学術誌等に報告、「地質調査法」(1987)など9編の著書（共著・共同執筆を含む）を出版されています。このうち地質調査所出版の地質図としては日本油田・ガス田図「富津-大多喜」(1962)、「三浦半島」(1968)、「茂原」(1971)をはじめとするシリーズ11編の刊行に携わりました。そのほか特殊地質図「東京湾とその周辺地域の地質」(1979, 第2版1995)、5万分の1地質図幅「横浜地域の地質」(1982)ほか、20万分の1地質図幅「横須賀」(1980)、「大多喜」(1980)など多数を共同で出版されています。

三梨先生が地質調査所に入所された当時、我が国では国内産地下資源、特に石炭、石油天然ガス等の燃料資源開発が急務とされ、地質調査所でも各地の調査研究を精力的に実施していました。その過程で三梨先生たちは火山灰鍵層を使った新たな層序対比の手法を開発しました。現在では鍵層を追跡する調査はごく当たり前の手法になっていますが、当時は「薄い地層が連続するなど常識的ではない」等の批判があったそうで、それでも「仲間と競って多数の鍵層を徹底的に追跡し、とくに複数の火山灰層の組み合わせを特徴にして精度の高い対比手法を確立した」と伺ったことがありました。三梨先生はさらに、鍵層のしめす同時期を面を広域に識別することで岩相や鍵層間層厚の時空変化を復元する「層相・層厚法」を開発し、堆積盆地の環境変化や構造変化などの発達史を克明に復元することに成功しました。

このような調査はその後他の地域にも広げられ、工業技術院特別研究「第三系堆積盆地の研究～新潟堆積盆地～」(1967-71)では、当該地域の層序、層相・層厚変化、褶曲構造の発達様式を詳細に把握する構造地質学的研究を行ない、その成果が地質調査所報告第250号1,2 (1974)や油田・ガス田図「魚沼」(1970)にまとめられました。島根大学に移られた後も科学研究費総合研究(A)「新生代における堆積盆地と褶曲構造の形成機構に関する実験的研究」(1984-85)の代表者としてこのテーマを展開され、その成果は地質学論集第34号 (1990)に報告されています。

これらの業績に対して1997年には日本地質学会賞が授与されました。授賞理由には「とくに房総半島において確立された火山灰鍵層にうらづけられた岩相層序は、浮遊性微化石による生層序の精密化、古環境変動の解析、タービダイトの堆積機構の研究、古地磁気層序や同位体層序の確立、構造運動の復元、シーケンス層序学など、地質学のいろいろな分野の研究を進展させるのに大きく貢献してきている」と評価されています。今日、本地域に「チバニアン」GSSPが承認されたことにもつながる礎を築いたといえると思います。

三梨先生の研究論文には専門分野の異なる研究者との共著が多いことは、確固たる層序学の基盤に立った地質学の発展性に常に関心があったためと思われます。研究室や通勤途上、盃を交わしながらも熱心に討論を繰り返した日々が思い出されます。

島根大学に教授として着任された1979年は、島根大学文学部地学専攻を理学部地質学科への改組の2年目で、新しい地質学教室が作られる時期でした。この時期に、教室あけて取り組む事業として島根県地質図編集・発行が進められていました。このような状況下に来られた先生は学生を指導する一方で、島根県地質図作成に積極的に取り組みました。1982年に大学の特定経費を受けて地質学教室によって20万分の1島根県地質図が出版されました。この地質図には地質調査所による海洋調査の成果に基づいた海域の地質も載せられました。

三梨先生は島根県地質図の編集のめどが立った頃からその説明書の編集・出版を島根県に働きかけていました。地質図が出版された翌年には、地質図説明書として島根の地質に関するこれまでの成果をまとめた資料を出版する計画が島根県によって始められました。この編集には、島根県工業試験場など県の諸機関や市町村だけでなく教育界、地質調査業界、鉱業会なども加わりました。その甲斐あって、1985年に600頁におよぶ大著「島根県の地質」が島根県地質図説明書として出版されました。

さらに、「島根県の地質」編集が契機となって島根県地学会が1986年に設立されました。なお2016年には島根県地学会は30周年記念に地学的名所案内書「島根の地形・景観・奇岩」を出版するなど今も活動を続けています（島根県地学会HP参照）。

これら以外にも、1983年の島根豪雨災害では教室の調査団団長として土砂災害の調査に取り組みました。また、当時淡水化で大きな問題になっていた中海・宍道湖の自然史を教室のスタッフが共同して研究していました。その一環として、三梨先生は「中海・宍道湖の自然環境変化に関する研究」(1985-88)の代表となって科学研究費一般研究(A)を受託されました。

このように三梨先生は多くの方々と手を組んで難しい仕事に取り組み大きな成果を上げて、新しい地質学教室の礎を作って下さり、多くの学生の育成に尽力くださいました。

私たちは地質調査所と島根大学地質学教室での三梨先生のご指導に感謝申し上げ、ここに謹んでご冥福をお祈りします。

（小玉喜三郎・山内靖喜）

（注）写真は、島根大学理学部地質学研究報告第7号「横山鼎教授・三梨昂教授退官記念号」(1989)より転載。

(金融機関用)

令和 年 月 日

預金口座振替依頼書
自動払込利用申込書(収加)

私は、SMBCファイナンスサービス株式会社から請求された金額を私名義の下記預金口座から預金口座振替によって支払うこととしたいので、預金口座振替規定を確約のうえ依頼します。

収納代行会社	SMBCファイナンスサービス株式会社	振替日	6日・23日(金融機関休業日の場合は翌営業日)
--------	--------------------	-----	-------------------------

(フリガナ)		申込人名		申込人住所		〒	
						☎	

ゆうちょ銀行以外の銀行またはゆうちょ銀行のどちらか一方に記入して下さい。

ゆうちょ銀行以外の銀行	金融機関コード		支店コード		預金種目 (どちらかに○印)	口座番号 (右詰めでご記入ください。)
					1. 普通	
					2. 当座	
	銀行組合	信用組合	本支店	出張所		
	(フリガナ)					金融機関 お届け印
	口座名義人					印
	法人の場合は、社名、代表者 役名、氏名を省略せずご記入ください。					

捨印
ゆうちょ銀行を除く金融機関へのお届け印ですか
ご注意!

ゆうちょ銀行	(フリガナ)					ゆうちょ銀行 お届け印
	口座名義人					印
	法人の場合は、ゆうちょ銀行へお届けの社名、代表者 役名、氏名を省略せずご記入ください。					
	種目コード	契約種別コード	通帳記号		通帳番号(右詰めでご記入ください。)	
	166	301	0の			
払込先口座番号		00110-5-58830		払込先 加入者名	SMBCファイナンスサービス株式会社	

(収納企業使用欄)

収納企業名	一般社団法人 日本地質学会	料金等の 種類	会費等
契約者番号	委託者コード 18476000	顧客コード 000000	

一預金口座振替規定一 ※ゆうちょ銀行払いは除く。

- 銀行(金庫・組合)に請求書が送付されたときは、私に通知することなく、請求書記載金額を預金口座から引落しのうえ支払ってください。この場合、預金規定または当座勘定規定にかかわらず、預金通帳、同払戻請求書の提出または小切手の提出はしません。
- 振替日において請求書記載金額が預金口座から払戻すことのできる金額(当座貸越を利用できる範囲内の金額を含む。)をこえるときは、私に通知することなく、請求書を返却してもさしつかえありません。
- この契約を解約するときは、私から銀行(金庫・組合)に書面により届出ます。尚、この届出がないまま長期間にわたり会社から請求がない等相当の事由があるときは、特に申出をしない限り、銀行(金庫・組合)はこの契約が終了したものととして取扱ってさしつかえありません。
- この預金口座振替についてかりに紛議が生じても、銀行(金庫・組合)の責めによる場合を除き、銀行(金庫・組合)には迷惑をかけません。

ゆうちょ銀行をご指定の場合は自動払込み規定が適用されます。

(金融機関へお願い)

この預金口座振替依頼書・自動払込利用申込書に不備がありましたら、不備返却事由欄の該当項目に○印をつけて速やかに右記不備返却先へご返送ください。

◎書類の流れ お客様→収納企業→SMBCファイナンスサービス→金融機関

金融機関 使用欄	(不備返却事由)			
	1. 預金(貯金)取引なし 3. 印鑑相違			
	2. 記載事項等相違 店名、預金種目、口座番号、 通帳記号、通帳番号、口座名義			
	4. その他()			
	備考			
	検印	印鑑照合	受付印	

店日附
取扱

(不備返却先)

SMBCファイナンスサービス(株)決済ビジネス事務部
〒108-6350 東京都港区三田3-5-27 ☎03-5444-1533

裏面のりしろ①

84 円
切 手 付
貼

101-0032

一般社団法人日本地質学会
一丁目八―一五 井桁ビル内
東京都千代田区岩本町

裏面のりしろ③

氏 名
住 所

のりしろ③

のりしろ①

キリトリ線

オリ線

御 中

のりしろ②

裏面のりしろ②

キ

ト

リ

線

一般社団法人日本地質学会倫理綱領

2003 年 9 月 19 日 日本地質学会総会制定

2009 年 12 月 5 日 一般社団法人日本地質学会制定 *

日本地質学会の会員は、科学的真理を明らかにする事を目的として、誠実かつ真摯に地質学および関連科学の研究・教育および調査を行う。その成果を広く社会に公表することにより地質学および関連科学の進歩普及を図り、もって社会の発展と人類の福祉に貢献する。会員は、基本的人権を守り、良識かつ品位のある行動をとる。

1. 科学者としての倫理：会員は、専門知識の向上および地質学と関連科学の発展を目指して自己研磨を図る。研究と調査においては、法を遵守し、社会的良識に従って行動する。科学的事実に対しては常に謙虚、誠実でなくてはならない。研究成果と技術上の知見を広く社会に公表し、公表にあたっては先人と他者の業績を尊重する。

2. 知的交流の確保：会員は、国際交流や他分野との交流を進めることを通して学術の向上を図るとともに、研究成果と技術上の知見が科学的に広く吟味・検証されるよう努める。

3. 人類と社会への責務：会員は、その専門知識と技術を適切に活用し、研究と調査の成果を広く社会に提供することを通して社会の発展と人類の福祉に貢献する。

日本地質学会

4. 地球環境への責務：会員は、地球システムの諸現象についての専門家として、地質災害の予知と防止、地球環境の将来予測、資源の適正な活用に関する情報を提供するとともに、専門知識を活かして環境の保全と改善に努める。自らの研究と調査の実施にあたっては環境への影響を最小限にするよう配慮する。

5. 次世代への責務：会員は、地質学と関連科学における学術と技術の継承と発展、次世代を支える人材の育成を図る。研究や調査の成果物、重要な露頭や標本などの科学的遺産の保全に努める。

*2009 年 12 月 5 日法人理事会において、一般社団法人日本地質学会倫理綱領として全文引継を決定。

もんだい

5月10日は

地質の日

ヒント



こたえ

もヒントも

気になったらWebで

<https://www.gsj.jp/geologyday/>



地質の日事業推進委員会事務局

国立研究開発法人 産業技術総合研究所 地質調査総合センター
TEL : 029-861-3540 E-mail : geologyday-jimu-ml@aist.go.jp

地質の日事業推進委員会：(一社)日本地質学会、(一社)日本応用地質学会、日本情報地質学会、日本古生物学会、資源地質学会、
(国研)産総研地質調査総合センター、日本地質学会、日本第四紀学会、(一社)日本鉱物科学会、日本科学未来館、
(地独)道総研エネルギー・環境・地質研究所、神奈川県立生命の星・地球博物館、(一社)全国地質調査業協会連合会、
(公社)東京地学協会、(独)国立科学博物館、全国科学博物館協議会、(NPO)日本ジオパークネットワーク (発行：2021年1月現在)